



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	学齡期の吃音児の言語処理に関する心理言語学的研究 : 語の音韻処理を中心に(審査結果の要旨)
Author(s)	高橋,三郎
Citation	
Issue Date	2015-09-29
URL	http://hdl.handle.net/2309/140053
Publisher	
Rights	

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

吃音は発話の流暢性の障害といわれており、学齢期における代表的な言語障害の一つであるが、背後にある言語処理メカニズムについては不明な点が多い。本論文は学齢期の吃音児の単語レベルの言語処理の特徴を明らかにすることを目的とした。

吃音はその多くが幼児期に発生し、初期は文の構造など統語的要因の影響を受けるのに対し、進展した段階では、語頭音の種類など、語に関連した要因の影響を強く受けるといわれている。学齢期の吃音児は進展した段階の吃音の特徴を示すことが示唆されているが、言語処理の特徴について詳しいことは明らかになっていない。本論文は、学齢期の吃音児の言語処理の特徴を実験的研究によって明らかにしようとしている点に意義がある。

日本語の言語処理において、モーラという韻律単位が重要であることは従来から指摘されている。しかし、これまでの吃音研究では十分な検討がなされてこなかった。本論文は、これまで検討されてこなかったモーラ頻度やバイモーラ頻度に焦点を当てており、この点に独創性が認められる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文の研究手法は言語障害学および心理言語学領域において用いられている代表的なものである。刺激語や刺激絵を提示して発話を促し、吃音頻度、反応潜時を測定するという方法が使用されている。刺激となる語や絵はノートパソコンのディスプレイ上にコンピュータ制御によって提示され、反応の録音はノートパソコンに接続されたヘッドセットを通じて行われた。また、対象児が児童であることを踏まえ、実験における教示や刺激語、刺激絵はよく工夫されており、実験は短時間で終了するように計画されていた。吃音の同定の際は、評価者間一致度が産出されており、吃音頻度の計算方法も従来の吃音研究に基づいたものである。

以上のことから、本論文で用いられている方法は、研究目的に合致したものであり、当該学問分野において妥当なものであると評価できる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文では、関連する従来の文献が適切に収集され、本研究の背景が明確に記述されている。特に、吃音児・者の言語処理に関しては、最近の研究動向が、欧米の研究を中心に綿密に押さえられている。

データ収集の際には、対象児の保護者に研究目的や個人情報取り扱いなどを説明し、承諾を得ており、対象児の人権に対する配慮が十分になされていた。実験における対象児の数も妥当であった。データ分析に関しては、比較すべき群間の年齢や男女比が適切に統制されていた。用いられた統計的手法も妥当なものであった。

以上のことから、研究資料やデータの収集および分析は適切になされていると評価できる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

総合考察では、学齢期の吃音児の言語処理について以下のような考察がなされている。モーラ頻度ではなく、バイモーラ頻度が吃音頻度に影響したという結果については、学齢期の吃音児は、2モーラをまとまりとした処理に困難さをもつのではないかと考察している。また、語頭と語末のバイモーラ頻度を操作した実験結果に基づき、語末も吃音の生起に影響を及ぼしている可能性があるとして述べている。これらの考察は、従来の吃音研究では指摘されていない点であり、今後の吃音研究に新たな研究課題を提供するものである。総合考察の最後では、非吃音成人のモデルを踏まえて、吃音児と非吃音児の単語レベルの言語処理モデルが提案されている。このモデルは、吃音児の言語処理は、処理の順序は非吃音児と同じであるが、反応時間が長いというものであり、吃音児の言語処理に関する新しい見方を含んでいる。

総合考察における個々の考察は、いずれも本博士論文のデータに基づくものであり、記述においては、方法が及ぼす影響など、研究上の制約が十分に踏まえられていた。

以上のことから、本研究でなされている考察及び結論が妥当であり、学術的水準に達していると評価できる。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文で取り上げた、学齢期の吃音児における単語レベルの言語処理研究の成果は、吃音児・者の言語処理研究のみならず、非吃音児・者の言語処理研究をも刺激し得る新たな知見を含んでいる。この点で、本論文の学術的意義や成果は高いと思われる。また、本研究で得られた知見は、学齢期の吃音児に対する、話し方の直接的指導法や、教材として用いる語の開発につながる可能性があるという点で教育上、臨床上の意義も有しているといえる。

以上の点を総合的に判断し、審査委員は全員が一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位授与に相応しいとの評価を行った。